



TITLE:

学校教育改善ユニット: 寝屋川市立 田井小学校における取り組み 2010年度

AUTHOR(S):

山本, はるか

CITATION:

山本, はるか. 学校教育改善ユニット: 寝屋川市立田井小学校における取り組み 2010年度. 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして 2011, 中間報告書(2010年度): 12-13

ISSUE DATE:

2011-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179644>

RIGHT:

寝屋川市立田井小学校における取り組み 2010年度

1. 活動の概要

寝屋川市立田井小学校と京都大学大学院教育学研究科との共同研究は、田井小学校が文部科学省委託学力拠点形成事業として算数科の研究を開始する2005年度に始められた。2007年度までは、京都大学大学院教育学研究科の教育認知心理学講座と教育方法学講座の教員・院生による共同グループを中心に取り組みが進められた。院生は、算数科の研究授業と授業後の研究協議会への参加に加えて、授業設計から参加した。ここでは、これまで行われてきた授業事例を示したり、教材を提案したり、また評価課題を開発したりすることによって、教員と共同で授業づくりを行った。

田井小学校における授業研究のあり方は、非常に柔軟性に富んでいる。これまでの研究蓄積や複数の立場の研究方法に学びながら、田井小学校としての最善の方法を創り出すことが目指されているからである。このような田井小学校独自の授業研究のあり方に関しては、赤井悟監修・大阪府寝屋川市立田井小学校研修委員会編著『高い学力を育む授業研究』（三学出版、2008年10月）に詳しい。

2008年度からは、国語科および「読解力」に焦点を当てた研究体制が構築された。京都大学からも、国語科あるいは「読解力」に関心を持つ教員・院生が中心となった共同グループが編成された。2010年度も引き続き、国語科および「読解力」の育成に関して、研究授業とその後の研究協議会への参加を行うことで共同研究を進めている。

2. 活動状況

2010年度は、田井小学校の研究授業の日程と京都大学の授業日程の多くが重なってしまったが、少ないながらも研究授業に参加させていただくことができた。そしてこの田井小学校との共同研究を通して、授業研究を行う上で大切にしなければならないことが浮かび上がってきた。結論を先に述べると、それは目の前の児童の様子を注視することの重要性である。本報告では、そのような田井小学校の授業研究の特徴を描き出すとともに、共同研究に参加する院生にとっての意義を記したい。

(1) 授業参観

2010年度の単元「ぴかぴかのウーフ」の研究授業は、2010年11月5日（金）に行われた。参加者は、趙卿我助教（コラボレーション・センター）と教育方法学講座の院生4名の計5名であった。

教材「ぴかぴかのウーフ」は、「くまの子ウーフ」シリーズの中の1冊であり、田井小学校の図書室にも所蔵されている。このシリーズは、普段から保護者ボランティアによって読み聞かせが行われており、子ど

もたちに身近な作品である。「ぴかぴかのウーフ」のあらすじは以下の通りである。

《あらすじ》

ウーフは、お母さんに、お気に入りのズボンを隣村のおばさんの子どもに譲ってあげるように言われ、反発して外に逃げ出した。きつねのツネタに魚とりを誘われても断り、石ころを蹴飛ばす。ヘビのおばさんには、新しい服を着る時の気持ちを教えられ、納得できない。そして、あなぐまのおじいさんに、たけのこが皮を脱いで竹に成長していくことを教えられ、感心したウーフの心は揺らいでいく。さらに、おじいさんに作ってもらった竹馬に興じている時、隣村のおばさんの子ども達にその腕前をほめられ、おばさんには大きくなったと言われたウーフは、自分からズボンをあげることに決める。



▶大阪書籍『しょうがくこくご1下』
「ぴかぴかのウーフ」P.68,69

このように、「ぴかぴかのウーフ」には、ズボンに執着していたウーフが、多くの登場人物との出会いを通して、成長していく様子が描かれている。授業者もこのウーフの成長、そしてウーフの気持ちの変化を読み取らせたいと考えた。そこで、「動作化」を取り入れた授業計画を立案した。「動作化」とは、作品に登場する人物の役になりきって演じることで、語句の意味を確認したり、物語の世界を豊かにイメージ化したりとすることがめざされている方法である。

研究授業では、「ぴかぴかのウーフ」の第2場面が扱われた。第2場面は、ウーフがツネタに子ども扱いされ、石ころを蹴飛ばす場面である。ここでは、石ころを蹴飛ばすウーフの気持ちを読み取るため、授業者の手作りの石ころを蹴飛ばすという「動作化」が取り入れられた。手作りの石ころは、3種類の大きさのものが用意された。ウーフの蹴った石ころの大きさを想像することにより、石ころを蹴飛ばす場面をリアルにイメージするためである。またツネタとウーフの役になりきるために、それぞれのお面も用意された。

子どもたちは大いに盛り上がり、「めっちゃくやしかったんやろうなあ」など、多くの発言がなされた。

授業者からもウーフの気持ちを問う発問がなされた。その際、ワークシートが用いられた。まずは、ワークシートに書くことで子どもたちの思考が促される。そしてこれにより、全体で交流する際にも、意見を言いやすくなるのである。

授業後の研究協議会では、登場人物の気持ちを理解させるためには、どのような「動作化」を行う必要があったのかについて議論がなされた。本授業では、1組の児童が「動作化」を行ったが、もっと多くの子どもに「動作化」を体験させてもよかったのではないかと、「動作化」した子ども自身に気持ちを発言させてもよかったのではないかと、気持ちを考えさせたあとに「動作化」を行わせた方が、より「動作化」が気持ちを想像するものとして位置づけられたのではないかと、などの提案や疑問が出された。

また子どもたちの発言をどのようにつないでいくのか、という観点からも議論がなされた。授業中、児童同士で疑問を出し合う場面が見られたこと、「ちゃんとおへそ向けて話聞こうや」などと注意を促し合っていたことなど、クラス全体で話し合いを行う雰囲気が作られていたことが指摘された。このように、研究協議会では活発な意見交換が行われ、1つの授業で扱われた教育方法の是非が議論された。



▶ 研究授業の様子

(2) 研究体制

このような授業研究を行っていく背景には、充実した田井小学校の研究体制がある。ここでは、田井小学校の研究体制の特徴の中でも、特に2点を挙げたい。

1点目は、授業観察シートの配布である。研究授業の際には、授業開始前に、児童の名前が書かれた座席表が配布される。これには児童の名前の下に空欄が設けてあり、児童の学習の様子を記入できるようになっている。またこのシートの裏側には、前時に児童が書いた意見や感想が、同じく座席表となって記されている。このシートにより、前時までに個々の児童がどの程度作品の理解を進めているのかを把握することができるとともに、各児童の思考の様子を随時把握し記入できるようになる。またこのシートは、次に記す2点目の特徴によって、さらに効果を発揮することができる。

2点目の特徴とは、特定の児童を観察するしくみである。学年ごとに、1つの班の児童の様子を書きとめることになっている。そのため、授業者の目の行き届かない場面であっても、授業参観を行う教師によって学習の様子が細かに記録されるのである。またこの体制で授業を参観することによって、研究協議会におい

ても、学年ごとに同じ子どもの学習の様子をもとに議論を行うことが可能となる。実際、研究協議会では、「私たちが見た〇班の△さんは、・・・」と各学年から特定の児童の様子が報告される。



▶ 児童の様子を見取る教師たち

以上のように、田井小学校では、1人の教師の研究授業に対して、全校の教師が協力しながら、協議を行う仕組みが作られているのである。

3. まとめ

ここまで見てきたように、田井小学校の授業研究は、子どもたちの様子を全校の教師の協力によって見取ることができるためのしくみが整えられていると言える。私たちは、この田井小学校の授業研究に参加することによって、児童の様子にもとづきながら授業研究を行うことの重要性を再認識することができる。多くの場合、授業を参観する際に特定の児童の様子を観察すること、具体的には全体交流の際に発言する児童や、観察の際、観察者の目の前にいる児童の様子は観察しやすい。一方でそれ以外の児童の様子にまで目を届けることはむずかしい。この点に関して、田井小学校では授業観察シートが配布され、さらには各学年で特定の児童を観察するしくみをとることによって、すべての児童の様子に目を届かせることができる。このように児童の様子を報告し合うことは、教員の児童の様子を見取る目を培うことにつながるだろう。またこのことによって、共同研究者にとっても、授業者のねらいと子どもの様子に関連づけることができる。教師側のねらいだけではなく、子ども側からの授業の様子を理解することができるからである。

今後の課題は、教師の願いに沿いながら授業に参観することである。研究者として発達途上にある大学院生にとって、授業研究に関わらせていただけることは、非常に貴重な経験である。しかしながら、今回は授業後の研究協議会の場ではじめて授業者のねがいを知ることができた。今後は、そのねらいを生かした指導案の検討にも参加させていただくことで、より深く教師のねがいを理解することを目指したい。

2011年度は、国語科に焦点を当てた研究の4年目に入る。多忙を極める中で、教師のねがいに沿いながら、どのように共同研究を行っていくのか、また共同研究を通してどのように院生の授業研究の力量を形成していくのか、今後も課題として取り組んでいきたい。

(文責：山本 はるか)